育 児 語 の 研 究*

——幼児の言語習得の一条件として——

——大阪市立大学 村 田 孝 次**——

幼児の初期発声は無条件的ないし生得的発声であるが、それによって偶然的に要求充足が生じ、その結果内外事象と発声との連合が強化されると考えられる。しかし、幼児の発声行動がユニークで効率の高い社会行動としての特性をそなえるためには、成人の発声行動が十分正確に模倣されなければならない。自己の特殊な要求をつねに、適切に充足するためには、成人の音声を正確に模倣することが必要である。

ここで育児語というのは、保育者が意図的あるいは非意図的に、幼児に対してのみ用いる語をさす。幼児が最初に模倣する言語音はこのような育児語に他ならない。育児語はそれだけが単独で用いられることもあるが、多くは他の成人慣用語の中におこまれている。しかしその中で育児語は、音声的強勢が加えられていること、一般に幼児にとって模倣しやすいこと、とくにきわだった音声パターン（音象徴形・重畳形など）をもつこと、などのために、とくに幼児が影響をうけやすい形で与えられる。

このように、言語行動の初期学習が成人音声の模倣を基礎とし、模倣されるものが育児語である以上、育児語の特性を明らかにすることは、言語行動の発達に関する基本的テーマの1つであるといえよう。Stern(3)の言語理論における輻輳 (Konvergenz) の原理は、成人から幼児への発声と幼児から成人への発声との交流の中から幼児語が形成されることを強調しているが、このような交流の一方の極に育児語が存在し、それが輻輳の影響下にあることは容易に想像されよう (c.f. 2, 5)。このように、育児語の特性に関する大まかな仮説は、少なくとも暗にはば一定したものが存在している。それにもかかわらず、育児語の特性に関する事実的資料は、内外ともなお全く欠けているのである。この報告が、育児語研究のいとぐちとして役立てば幸いである。

方 法

(1) 調査者 京都女子大学1年生100名。

(2) 調査対象 1:0~1:11の1才児(男44名、女56名)の母親100名。実際には106名(回収率82.8

* A Study of the Nursery Language in Japan.

** Kōji Murata (Osaka City University).

%)の資料がえられたが、方言要因を考慮して、東部方言地域(4)からの6資料を省いた。地域別にみると、九州17名、四国10名、中国21名、近畿42名、北陸8名、東海2名。児童の年齢分布は、1:0~1:2が12名、1:3~1:5が25名、1:6~1:8が29名、1:9~1:11が34名、母親の年齢範囲は22~36才で、全体の80%が20才台。

(3) 調査期間 1959年6月24日~1959年9月16日。

(4) 調査方法 1才児の生活に関係が深いとおもわれる378項目(人間関係・職業・身体・衣類・食物・遊具・乗物・動植物・人の動作状態・状態一般・あいさつ)を選び、これらについて育児語と幼児語とをなるべく原音声に忠実に、母親から報告させ、これを一定のカタカナ表記法(1)により、調査者が転写する。幼児語調査は育児語調査の少くとも3日後におこなう。

結 果 と 考 察

(1) 育児語の分析

総数378項目中10%以上の育児語をふくむ項目は180項目。育児語のふくまれる比率とその項目数はつぎのようである:100~91%(1), 90~81%(6), 80~71%(14), 70~61%(10), 60~51%(11), 50~41%(24), 40~31%(28), 30~21%(28), 20~11%(58)で、10%以上の育児語をふくむ項目が全体の46.0%, 50%以上のそれが11.1%を占めている。一般に、育児語を多くふくむ項目は少数である。ここでは50%以上の育児語をふくむ42項目について分析する。

A 育児語の頻度と語種との関係

Table 1は項目別に育児語の延頻度、種類(語種)、および最頻語の頻度を示したものである。たとえば冒頭の項目「就寝する」に対する育児語の延頻度は96(96%)であり、その語種は3種、最頻語の頻度は92(延頻度に対する95.9%)である。語種とそれぞれの頻度は、具体的には、ネンネ92、オネンネ3、ネンネン1である。この例では、延頻度が最大で語種が非常に少く、最頻語頻度が非常に大きい。一方、この表の最終項目「散髪する」をみると、延頻度(51)に対する語種(20)は大で、最頻語頻度(10)は小であることがわかる。このよう

Table 1 項目別の育児語の延頻度・語種・最頻語頻度

項 目	育 児 語			項 目	育 児 語		
	延頻度	語種	最頻語頻度		延頻度	語種	最頻語頻度
就寝する	96	3	92	汽 車	69	12	26
手	89	4	59	自 転 車	69	16	31
ネ コ	84	13	26	下 駄	68	15	26
背 負 う	84	17	37	怪我する	68	9	30
イ ヌ	83	4	79	自 動 車	67	12	31
抱 く	83	5	75	小 鳥	65	20	18
す てる	82	9	38	皮をむく	62	16	29
眼	79	4	47	横臥する	61	6	56
起立する	79	9	43	さ ま す	61	11	35
和 服	78	9	37	水	60	19	8
足	77	6	56	仏 だ ん	59	28	15
ネ ズ ミ	76	9	50	坐 る	58	33	12
ウ シ	76	11	32	う ど ん	57	12	28
きたない	76	22	22	金 魚	55	12	15
魚	74	13	21	排便する	55	16	18
歩 く	74	13	39	這 う	55	9	46
入浴する	72	29	10	注 射	54	19	20
さよなら	72	13	58	卵	52	15	13
頭	71	9	46	字をかく	52	15	14
腹	71	5	63	牛 乳	51	16	28
叱 る	71	21	18	散髪する	51	20	10

な傾向を育児語延頻度 50% 以上の 42 項目全体についてみるために、Pearson の相関係数を求めると、延頻度と語種との間には -0.47、延頻度と最頻語頻度との間には 0.47、語種と最頻語頻度との間には -0.78、の相関係数がえられた。この 3 つの関係のうち、とくに語種と最頻語頻度との間にかなり高い相関関係があることが注目されよう。しかし、この傾向は、ここで取扱ったような延頻度の比較的大きな項目についてのみよく妥当することはいうまでもない。ともかく、上述の検討によって、育児語には慣用のものが多数あり、育児語延頻度を大にするものはこのような慣用育児語であることが示唆される。

B 育児語における擬音擬態語と重畳語

幼児語の特性として、成人慣用語の音声の転化、脱落、添加などがあげられるが、これにおとらず顕著なものが擬音語擬態語である。これらのことは育児語にもあてはまる。もちろん本研究では、幼児語と育児語とがこれらの点に関してどのような因果関係をもつかを追及することはできないが、育児語におけるこれらの特性を分析することによって、幼児語との連関を明らかにする手がかりを提供したいとおもう。

成人慣用語からの音声的変容語については標本数が少いので分析をおこなわず、擬音語擬態語について分析す

る。擬音語と擬態語との区別は細部の点では必ずしも明確ではないが、当面の資料に関しては判断できない場合はほとんどなかった。

育児語には同一形態から派生した類語が多数ふくまれている。(ネンネ、ネンネン、オネンネ)、(タマ、タマタマ、オタマ……)などがこれである。これらの各類語群のうちから、項目ごとに擬音擬態語に属し、最も頻度の高い 1 語をとりだす(1 項目中に該当する語のない場合もあり、反対に該当語が 1 つ以上ある場合もある)。たとえば「腹」については、(ポポ、ポンポ、ポンポン、オポンポ)などの類語があるが、このうち上記の基準に該当するものはポンポンである。この方法で 42 項目中の代表的な擬音擬態語をとりだすとつぎのようである：腹(ポンポン)、下駄(カンカン、コンコン、チャッチャ、カタカタ)、飲物(チューチュー、ゴクゴク)、うどん(ツーツー、ズーズー、ツルツル、チューチュー、チュルチュル、ペロペロ)、卵(ポーン、パン、プチン)、汽車(ポッポ、シュッポー)、自動車(ブーブー)、自転車(チンチン、チリンチリン、リンリン、ブーブー、ジーンジーン)、ウシ(モーモー)、小鳥(チッチ、チュッチュツ、コッコ、ピーピー、ピヨピヨ、ポッポ)、排便する(ウンウン、パツパ)、散髪する(カチカチ、チョキチョキ、ジョキジョキ、ジョリジョリ、バリバリ、ズーズー、ゾリゾリ)、入浴する(チャブチャブ、ジャブジャブ、ボチャボチャ)、這う(チン、チョン、ヤットン)、捨てる(パーン、トン)、果物などの皮をむく(プチン、パン、クリクリ)、さます(フーフー、ブーブー)。以上のように 17 項目(全項目数の 40.5%) 53 語をえた。擬音擬態語が育児語において占める地位はこれによって大体うかがうことができよう。

幼児語と育児語とに共通する第 3 の特性は重畳形式である。擬音語擬態語の具体例からも明らかなように、同一音声パターンの重畳ないし反復の形式は、育児語においてもきわめて顕著である。重畳語はその他、サムサム(うちわ)、オチャチャ(お茶)などにみるように、成人慣用語形の変化型にもみられる。ここではこれらを合わせたものについて分析する。

重畳語を語形で分類するとき、完全重畳形(たとえばポンポン)と不完全重畳形(たとえばポンポ、オポンポン)とに分けることができる。不完全重畳形には、撥音、促音、長音の反復時脱落及び相互置換、美称語などの付加、およびそれらの組み合わせがふくまれている。育児語における完全重畳形と不完全重畳形の頻度を集計すると、前者は 42 項目中 41 項目に、後者は 42 項目中 38 項目に、それぞれ生じている。その総頻度は、42 項目 2896 語中、完全形は 1160 (40.1%)、不完全形は 612 (21.1%) ふくまれ、完全形と不完全形とを合わせると、重畳語は全育児語の過半数 (61.2%) に達していること

がわかる。

C 育児語の集計的汎用

幼児は多くの事象を表示し、あるいは多くの要求を表出ないし伝達する手段として、1つの特定音声パターンを用いる傾向がある。これを幼児語の側からみれば、幼児語はその1つ1つが種々の事象に広く用いられる（汎用）という点に大きな機能上の特徴がある。この特徴が幼児自身の生得的傾向の反映なのか育児語による習得の結果なのかということをここで検討することはできないが、少くとも何らかの形において幼児語の汎用性と深い関係のあるはずの育児語の汎用性を、われわれの資料によって検討する。

ここではまず、資料全体をこみにして、1つの育児語が1つの項目だけにでなく、他の項目にも用いられている程度（汎用度）をしらべる。育児語の汎用度は、幼児が幼いほど大であると予想される。1才児においてはどの程度の汎用が育児語にみられるであろうか。育児語の頻度10%以上の項目170について分析する。汎用に2種が大別される。1つは、同一育児語の与えられる項目間に、形態・属性・機能の全部または一部に大なり小なり類似のある場合の汎用（連関汎用）である。たとえば、イロイロ（絵本・新聞・クレヨン・鉛筆・字をかく）、パタパタ（うちわ・はたき・てんか粉）、ポッポー（汽車・電車・自動車）などである。連関汎用語は82語種である。

汎用の第2の型は、同一育児語の与えられている項目間に上述のような共通点をみださない場合である。たとえば、ブンブン（入浴・飛行機・ろうそく）、トントン（ふとん・たいこ）などがこれである。この種の汎用語を無連関汎用語とよぶことにする。その総数は27語種あった。

この事実、育児語が音声単位の種類と音声系列の長さにおいて大きな制約をもっていることを示している。しかし、育児語が異なる事象を同じ語によって表現するという意味において制約があることを直ちに意味するものでないことはもちろんである。ここでは全資料をこみにしており、したがって特定保育者の汎用度そのものを示したものではないからである。後者の問題がつぎに検討される。

D 育児語の個人的汎用

一人の母親がその幼児に対して一育児語をどの程度汎用するかという問題は、言語ないし概念の発達に関する基本問題である。連関汎用語について分析することとし、まず個人的汎用度が最大の「食物」に関する育児語（マンマ・ウマ・ウマ語群）の汎用をしらべる。食物に関する項目のうち、10%以上の頻度をもつ育児語をふくむ項目だけをとりだし、これらに対する汎用度をしらべる。該当項目は、飯・うどん・パン・クラッカー・ビスケット

Table 2 マンマ・ウマ・ウマ語群の汎用

	総事例数	汎用例数	汎用率	汎用項目の率	非汎用項目の率	欠語項目の率
1:0~1:2	12	10	83.5	29.3	43.9	26.8
1:3~1:5	28	19	67.9	25.0	55.0	20.0
1:6~1:8	31	15	48.4	26.3	57.9	15.8
1:9~1:11	35	11	31.4	15.8	79.0	5.2
計	106*	55*	50.5	24.1	59.0	16.9

* 同一の母親が2つの語の汎用を示した事例6を加えてある

キャンデー・キャラメル・おかき・リンゴ・ミカン・スイカ・魚・肉・卵・とうふ・砂糖・氷・アイスクリーム・牛乳・汁の20項目であった。年令段階を3カ月のステップで4段階にわけ、1:0~1:2, 1:3~1:5, 1:6~1:8, 1:9~1:11, のそれぞれにおける汎用を集計する。Table 2の「汎用例数」がこれを示す。マンマ・ウマ・ウマ語群の語で個人的汎用を示した語は、マンマ、ウンマ、ウマ、ウマウマの4種に限られた。ここで汎用として数えられたものは、同一汎用語（たとえばマンマ）の汎用であり、一人の母親がマンマとウマウマとをそれぞれ別の項目間に汎用している場合は、マンマの汎用とウマウマの汎用とが共に汎用として数えられる。

Table 2の「汎用率」は、総事例数に対する汎用例数の比を百分率で示したものであるが、年令段階をこみにすると、食物語における汎用率は50.5である。また汎用率は年令段階があがるとともに減少している。この傾向は統計的に有意である($\chi^2=13.67$, $df=3$, $p<0.01$)。母親の教育的意図によるのか、あるいは発達していく幼児語からの「借用」にもとづくのか、ということは別として、年令段階と汎用率との間に上記の関係があるということは興味深い。

汎用例中にくまれる汎用項目、非汎用項目、ならびに欠語項目の数の中央値を年令段階別に求め、この3種の項目に対するそれぞれの項目の比を百分率で示すとTable 2の右側の3つの列のようになる。汎用項目の占める割合は年令が進むとともに減少し、非汎用項目のそれは年令とともに増加する。この傾向も統計的に有意である($\chi^2=11.63$, $df=3$, $p<0.01$)。このような傾向は前段で記した汎用率の傾向とよく符号し、両者をあわせてみると、育児語の汎用の顕著な特性が浮かびあがる。

同じ操作を飲物語（ブー・オプー語群）、火に関する語（アツアツ・アチアチ語群）、きれものに関する語（イタイタ・アイタ語群）、衣類語（ベベ語群）、など個人的汎用度の大きなもの順に適用した。その結果、飲物語と飲物項目（水・お茶・汁・牛乳）との間には、食物語の場合と全く同様の傾向がみられた。火に関する語と火の項目（火・火鉢・マッチ・ろうそく）、ならびに、きれものに

関する語ときれものの項目(針・針箱・ナイフ・はさみ)における汎用については、汎用率にのみ食物語と同一傾向が認められた。衣類語の衣類項目(和服・洋服・ねまき・スカート・シャツ・ズボン・パンツ)に対する汎用については、上記の諸傾向は1つも認められなかった(傾向の示唆されたものもすべて統計的には有意ではなかった)。

以上のように、食物語と食物項目間に認められた有意な傾向は、他の語と項目の間には十分確信のある形では認められなかったのであるが、食物語以外の語群については、その事例数が少く今後検討の必要がある。なお集計的な汎用で無連関汎用がかなり多く生じたが、個人の汎用の事例は1例もなかった。

E 育児語の概括効果

育児語の顕著な汎用傾向が、どの程度幼児語の借用を通じて生じるかという問題への解答は、周到な縦断的事例研究にまつ以外にないけれども、少くとも一部の育児語の汎用において、育児語の積極的な意義は認めてよいとおもう。たとえば、「アリ(昆虫)」の育児語として、アジ、ミイミイ、イタイタなどが報告されているが、アジは一般にアリに対する専用語であり、ミイミイは、少くとも西部・九州方言地域では、「ハエ」「セミ」などの昆虫一般に与えられる汎用語であることが多い。たとえば、前項にあげた、食物語は、「行動的に、しかも自発的に概括化されやすい事象群」に関する語であり、育児語の汎用の一部は、幼児自身の自然的汎用を反映しているのであろう。これに対して、ミイミイのような場合、幼児自身の自然的汎用を期待することは上述の場合ほど容易ではない。ミイミイは擬音語擬態語のいずれにも属さない語であり、この種の育児語の汎用は、幼児自身の概念構成ならびに談話機能の発達に積極的に寄与するものと想像される。

このことは、刃物やきれものないしそれに関係する事物に対するイタイター-アイタ語系についてもいえる。しかもこの場合には、たんなる概括的命名にとどまらず、幼児に対して生活上必要な、対象の影響の性質ないし力を指示する作用が生じるであろう。この種の汎用は、多くの対象・事象に対する適切な行動・態度を幼児に習得させるのに役立てることができよう。

(2) 育児語と幼児語との関係

ここでは育児語と幼児語との関係を、所与の母子間の音声的類似と汎用の類似とに関して検討する。幼児語の基礎資料は前述のように、母親の口答報告を調査者が一定のカタカナ表記法により転写したものである。したがって、母親の幼児語模写と調査者の聴取・転写のそれぞれの信頼性が問題となるが、この問題はここでは無視する。

100 資料のうち、幼児語を添記しなかったか、添記があきらかに不適当ないし不完全なものを除くと、60 資料になった。これらの資料のうち、ほぼ同程度の規模の大項目を立てることができ、かつ育児語ならびに幼児語が下位項目3項目以上に個人的に汎用している大項目だけをとります。その大項目とその下位項目(括弧内)はつぎのようである: 1. 衣類(和服・洋服・ねまき・シャツ・スカート・ズボン・パンツ), 2. 履物(靴・下駄・草履), 3. 足袋類(足袋・靴下・ソックス), 4. 食物(飯・うどん・パン・クラッカー・ビスケット・キャンデー・キャラメル・おかき・とうふ・卵・魚・肉), 5. 飲物(牛乳・水・お茶・汁), 6. 乗物(汽車・電車・自動車・飛行機・船), 7. 獣(イヌ・ネコ・ネズミ・ウサギ・ウシ・ウマ・キツネ・タヌキ・サル), 8. 虫(アリ・ハエ・トンボ・チョウ・セミ), 9. きれもの(はさみ・ナイフ・針・針箱)。なお以下の分析において、汎用語はすべて育児語と幼児語であるけれども、専門語の中には成人慣用語がふくまれている。

A 分類基準

つぎの分類基準によって、育児語と幼児語との音声類似と汎用類似の程度を分類する:

I. 両語が大項目の全下位項目に関して全く同一(「合同」)。

- A. 一語の全汎用
- B. 一語の一部汎用
- C. 全語専用

II. 両語が大項目の全下位項目に関して一部または全部異なる(「非合同」)。

- D. 育児語は汎用, 幼児語は専用
- E. 育児語は専用, 幼児語は汎用
- F⁺. 育児語の汎用度は幼児語の汎用度より大(両語の汎用語が同一の場合と異なる場合とをふくむ)
- F⁰. 両語の汎用度は同一(両語の汎用語が同一の場合と異なる場合とをふくむ)
- G. 全語専用

以上8カテゴリーの実例をつぎに示す(括弧内の番号は資料番号, 括弧内のカタカナは幼児語)

A (No. 35)

牛乳: オブッコ (オブッコ)
水: オブッコ (オブッコ)
お茶: オブッコ (オブッコ)
汁: オブッコ (オブッコ)

B (No. 45)

クラッカー: マンマ (マンマ)
ビスケット: マンマ (マンマ)
うどん: ツーツー (ツーツー)

:

C (No. 40)

牛乳：モーモーチチ（モーモーチチ）

水：ミズ（ミズ）

お茶：オチャ（オチャ）

汁：オチュー（オチュー）

D (No. 41)

セミ：チッチ（チッチ）

ハエ：チッチ（チチ）

トンボ：チッチ（チチ）

：

E (No. 29)

靴：クック（アイヤ）

下駄：ゲッコ（アイヤ）

草履：ゾーリ（アイヤ）

F⁺ (No. 45) [汎用語が異なる場合]

飯：マンマ（ウマンマ）

クラッカー：マンマ（ウマンマ）

豆腐：マンマ（ウマンマ）

魚：オトト（ウマンマ）

F⁰ (No. 44) [汎用語が異なる場合]

肉：オトト（トト）

魚：オトト（トト）

豆腐：オトフ（トッフ）

G (No. 28)

汽車：キンシャ（ボッポ）

電車：デンシャ（ガッタンガッタン）

自動車：ジドーシャ（ブーバー）

飛行機：ヒコーキ（ブンブン）

船：オフネ（ウネ）

B 育児語と幼児語との音声—汎用の類似性

60 資料につき上記基準で対標本を分類する。その実数（頻度）を Table 3 に示す。分析の目的に応じて 8 カテゴリーの一部をまとめたものあるいは単独のものを比率によって比較したものが Table 4 である。各大項目

Table 3 育児語と幼児語の対事例数（カテゴリー別）

	A	B	C	D	E	F ⁺	F ⁰	G	計
1. 衣類	2	5	4	0	6	3	10	4	34
2. 履物	2	2	14	0	6	0	3	9	36
3. 足袋	0	9	5	0	1	2	7	1	25
4. 食物	1	8	4	0	9	17	4	4	47
5. 飲物	2	7	7	0	9	3	7	10	45
6. 乗物	0	2	8	0	9	3	3	12	37
7. 獣	0	0	10	0	3	0	0	10	23
8. 虫	1	4	6	1	6	2	4	1	25
9. きれもの	1	1	1	0	3	2	1	0	9
計	9	38	59	1	52	32	39	51	281

Table 4 各カテゴリー（あるいはその群）の事例数の比率（%）

	A+B +C	D+E+F +G	E+F ⁺	F ⁰	E+F ⁺ +F ⁰	G
1. 衣類	32.4	67.6	26.5	29.4	55.9	11.7
2. 履物	50.0	50.0	16.7	8.3	25.0	25.0
3. 足袋	53.9	46.1	11.5	30.8	42.3	3.8
4. 食物	27.7	72.3	55.3	8.5	63.8	8.5
5. 飲物	35.6	64.4	26.7	15.6	42.3	22.2
6. 乗物	27.8	72.2	30.6	8.3	38.9	33.4
7. 獣	43.5	56.5	13.0	0.0	13.0	43.5
8. 虫	44.0	56.0	32.0	16.0	48.0	4.0
9. きれもの	33.3	66.7	55.6	11.1	66.7	0.0
Mdn	35.6	64.4	26.7	11.1	42.3	11.7

において育児語と幼児語とが「合同」の事例数（A+B+C）は 37.7% に達している。Table 4 に示すように、A+B+C と D+E+F+G のそれぞれの占める比率の中央値（Mdn）は、それぞれ 35.6%、64.4% であり、その差はノンパラメトリック法 *T* 検定によれば有意である（ $p < 0.001$ ）。

Table 4 の中央の 2 列は、大項目に関して、幼児語の汎用度が育児語の汎用度よりも大である事例（F⁺）の数と、幼児語が汎用され育児語が専用されている事例（E）—これは F⁺ の特殊の場合と考えられる—の数との和と育児語と幼児語との汎用度がひとしい事例（F⁰）の数との、全事例数に対する比率を示す。この 2 組の比率の中央値間にも有意差がある（ $p < 0.05$ ）。

Table 4 の右側の 2 列は、育児語と幼児語とが「非合同」の場合、汎用の生じた事例（E+F⁺+F⁰）数と、汎用の生じなかった事例（G）数との、全事例数に対する比率を示す。この 2 組の比率の中央値間にも有意差がある（ $p < 0.05$ ）。

以上の諸結果を総合するとき、（1）「合同」の事例数はかなり多いとはいえ、「非合同」のそれに及ばないこと、（2）育児語と幼児語とがひとしい汎用を示す事例数よりも、後者の汎用度が大きい事例数の方が多いこと、（3）育児語の汎用度が幼児語のそれより大きい事例はほとんどない（Table 3 の D 参照）こと、（4）「非合同」の場合、非汎用（全語専用）の事例数は汎用事例数よりも少ないこと、などが明白となった。

C 育児語と幼児語との類似性と年令段階

Table 3 を基礎として、Table 4 と同様の比較を年令段階別におこなう。ただし Table 3 のすべての大項目をこみにする。Table 5 がその結果であり、その（1）は、年令段階の上昇とともに「合同」事例数の比率は減少する傾向が示唆されている。（この傾向は $\chi^2 = 2.23$, $df =$

Table 5 育児語と幼児語の類似性と年齢段階との関係 (%)

		1:0~ 1:2	1:3~ 1:5	1:6~ 1:8	1:9~ 1:11
	標本数	18	39	92	132
(1)	A+B+C D+E+F+G	50.0 50.0	43.2 56.8	38.0 62.0	34.9 65.1
(2)	E+F ⁺ F ⁰	16.7 83.3	77.8 22.2	68.7 31.3	70.0 30.0
(3)	E+F ⁺ +F ⁰ G	66.7 33.3	85.7 14.3	84.2 15.8	58.1 41.9

3, $p > 0.50$ で有意ではないが, 1:0~1:2 と 1:9~1:11 との間には $\chi^2 = 4.65$, $df = 1$, $p < 0.05$ で有意差がある。) その(2)は「非合同」事例における汎用度の比較であり, (3)は同じ「非合同」事例における汎用事例数と非汎用事例数の比率間の比較であるが, (2)(3)いずれについても, 年齢段階との間に一義的な傾向は認められない。

結 論

この調査研究によって, いままで全く臆測の範囲をでなかった育児語の特性のいくつかは明らかになったとおもう。育児語はたんに幼児語の模倣でもなければ, 幼児語と独立の特殊記号群でもない。それは, 育児語の項目別の延頻度・語種・音象徴形式・重畳形式などにみるように, 幼児語と類似の性質をもつ半面, その汎用におい

て, 幼児語に対する命名的あるいは機能的概括学習の契機を作るとともに, 幼児語の「自然的」汎用傾向に対して, 先んじて専門語を与えることによって, 幼児の語彙の拡大化に寄与すると考えられる。1才児という狭い年齢範囲においてさえ, 育児語の汎用度は漸減しており, また幼児語との音声的類似度も減じる傾向が示されている。育児語は母親の意図の有無にかかわらず, 計画性と指導性ををもつような形で組織されている。育児語と幼児語との共通性は, 母子の対人関係に要求される限りに存在し, このような共通の場こそ育児語の計画性と指導性が発揮されるために不可欠であると考えられる。

この調査を担当した京都女子大生の諸君と, 調査計画ならびにその実施に多くの便宜を与えられ, 示唆を与えられた生沢雅夫氏とに心からお礼申しあげる。

文 献

- 1) 金田一春彦(編) 日本語アクセント辞典, 東京三省堂, 昭 33 (1958).
- 2) Lewis, M. M. *Infant speech*. London: Kegan Paul, 1951.
- 3) Stern, W. *Die Kindersprache*. Leipzig: Barth, 1907.
- 4) 東条操(編) 全国方言辞典, 東京 東京堂, 昭 26 (1951).
- 5) 矢田部達郎 児童の言語, 東京 創元社, 昭 31 (1956).

——1960. 1. 14. 受稿——

音楽的表現の価値判断に関する因子分析的研究*

——慶応義塾大学 久 野 麗**——

I 序

芸術的なものの価値を判断する際には, その判断の基礎となるものに, 人により異なる幾つかの型が存在するのであろうか, または誰もが共通の一つの基礎をもとにして判断を行うのであろうか。そのいずれであるかについて, 以前から調べてみたいと思っていた。

従来, 美的価値を取扱ったものとしては, G.D. Birkhoff (1) の *Aesthetic Measure* が有名であるが, それは対象の持つ複雑さや秩序に関して一定の測度を設け,

* A Factorial Study of Aesthetics in Vocal Music.

** U. Kuno (Keio University).

その測度によって美的価値を表すのであり, 真に我々が美しいと思うものと, そこで美的価値が高いと計算されたものとは, 必ずしも一致しないように思われる。また, 被験者の判断を求めて同様な価値を取扱った研究もあるが, 極端に簡単な場合のみについての研究が多い。

一方, Pickford (4) の行った絵と音楽に関する因子分析を用いた研究は, 被験者の判断に基づく, 相当に複雑なものの芸術的価値の研究である。しかし, 彼の実験における判断者は普通の大学生であり, 彼等にとって2時間の間に16から18個の作品を, 8から10の側面から7点尺度で評価することは, 容易でないように思われる。彼は評価された側面間の相関をとって因子分析を行